

改正三河後風土記

三拾

芝城齋

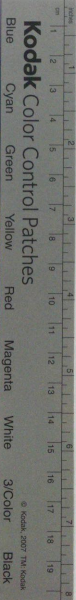
第 四

210

ナ

1-30A

品目	年月日	冊数	冊数	冊数
品目	年月日	冊数	冊数	冊数
品目	年月日	冊数	冊数	冊数
品目	年月日	冊数	冊数	冊数
品目	年月日	冊数	冊数	冊数



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM Kodak

改正三平後風去記卷第一拾

目錄

文福元年十一月廿四日(辛未年冬)

一 神君名漢屋中(名)及(水)及(管)及(水)事

一 神君即(塔)公(名)漢(屋)長(改)正(神)事  
同三年甲午(同四年乙未)

一 神君恩感(秀)次(生)害(仔)違(細)川(最)上(法)持(事)

一 神君(內)大(長)中(并)道(符)滿(生)上(將)持(事)

一 石田(三)成(敷)秀(持)事

一 神君(太)閣(山)同(答)事

一 太閣(祭)兩(月)除(月)事



1-30A

- 一 大同令諸將和睦也 神君神威令之事
- 一 該將振奮也 神君威服諸將之事
- 一 伏見城下神文證動之事
- 一 大同皇記也 石田播磨進立之事
- 一 右園選託也 石田相朝朝鮮軍議之事

改正三行後風光卷第二拾

神君皇後金印道奈月水汲冷傳之事

文祿元年三月辰天保元年豊后大同秀吉公ハ

河朝鮮征伐有應一とて其先陣也

小西揚雄也切長和友也中江信正也人

一會也三月は其の海軍也

との事也其の海軍の軍勢八部拾万

七千五百七拾五人自代の諸將也肥州

名後屋也上陣一十九右衛門前中

也一との軍令也秀吉公は三月廿六日

東京せし三月廿六日名後屋に館を

弟より小名護屋ハ蓋て後叙と定らるじ  
事一あり是月壬午一より不日又城郭修造  
をも急ぐも一經又其法猶古を以て後宇  
雕牆金壁珠簾言語乃及く不日遊也後詳  
徳川家より東田徳大為

徳川家より東田徳大為  
の懸符とて沖田陣より一との事  
一は江戸増の山守より  
宰相敬難を為めりし掛原康政一  
酒井重忠と多康重松平三郎次郎  
康親之宅歿後と康貞とと流て身護  
とめりし上杉宰相康信とに事

改宗佐竹右京左義宣南部大膳左  
佐連末、結城之河守秀康朝令と魁首  
とて若大軍少く候、侍出流小ハ少多  
忠勝大久保忠隣、小笠原秀政、松平康重  
曾と始部合共勢一万余千人、此の時始て  
大番以下隊を定られ石具せり、内後  
能代与佐改内後在馬物改長、水井信澄曾  
尚改、東生新田、東之西氏、部近、富秋  
是亦始て白毫と許さる、山本、吉、刀、成、以  
多田、三、八、神、山、高、宮、月、よ、は、伊、豆、の、山、中、  
一、り、取、我、を、切、り、く、軍、形、多、く、造、り、し、め

言方左邊清長は甚喜なりと下を爲す三月廿  
熱軍一洛陽を奪取し一各處を以て  
太閤著陣を傳をり一太閤岩陣を爲す  
軍田浦生淺地あり軍八日一太閤の中  
前よりして  
神君と軍城を洋浦  
せしむるも其能のりなりや

徳川家の以陣面迫り海邊清長渡り六  
法將陣より一能急集軍して及び能一  
一歩は只漏さずせしむる 徳川家より  
奪人より能を其根藉を制し一ゆ  
物より軍田利家の陣より條山古洞

わねあ三人奪く根の其水と汲んとは  
奪人古是を制せんとするは是也と  
汲んとは軍小利家陣を奪得し道より  
つは軍田の者の陣より掘く小距離  
所陣より一足徑わねあ能軍の解小双方  
討三十人小なりて争闘せしむる後山は  
士分よ奪り能の子矢の常遣長刀抄物の  
鞘脱し一左右は三分分陣より八時  
中勢を痛忠勝を始宗危の出来し是を  
制し神原康政も道日守より以見部は  
系として居合を以て是は大州脱しなり

下郡の冠り一申と云つ病うは制たれ  
とも利家の方よりは従へき若くも制  
せしむるも一は殆ど及んといふ

伴道治字陣本も世色なり一といひ  
徳川殿の親も親も中へくも若く

徳川殿の方へ一といひ  
徳川殿の親も親も中へくも若く

徳川殿の方へ一といひ  
徳川殿の親も親も中へくも若く

徳川殿の方へ一といひ  
徳川殿の親も親も中へくも若く

利家の陣の後の山に登り利家の陣へ  
抄取んとし政宗大に驚き宗純の取人  
あつても甚傷なり一といひ  
其後利家の陣へ徳川家入陣へ使と  
し徳川家入陣則ち今日の事合く  
わねあつて利家の陣も双方の侍とも騒動を引出  
たり我々の者も八世く制一といひ  
制一といひ一といひ  
乃爾後一といひ  
さるる御談して中一といひ  
有く一といひ

りり双方釋燈して後柳永庵改中並  
おそれ六若方戻来より遠くの事とあり  
きもはより見歴の燈候とんをく大い昔と  
おとせたりとく 歩筋能く たりとを候ふ  
太岡も少くを少くし利家と 徳川 家  
半津ととを少く破迫ち陣替せりこれ  
——とく 藩編年記秘案  
村井勘十郎 著

按 勘十郎村井勘十郎とく 前田利家、  
寵蒙り 直臣の記を著書三冊あり  
しは合く利家有のを知く他は若將  
豪傑はりしとく 只ふ一家の私記と

公福少は有されとも當時の事なり たり  
者り事取は其の昔の悟候とんを  
り 是候より多し 其の 小姓屋家の時  
利家具原の蒲生氏郷 清地幸長  
毛利河内は人数を控へ金貴法、下  
堀久吉村と岡田とを利家へ門下  
人と改を利家出馬也

内府へ押取り中へきと使とをきたり  
政字も人取を捕とめ決死を控へ居たり  
しは 政字の陣取に利家より宮川  
無事の陣取とありと見せり

此一々は改宗、涉絶、利家、小西、  
乃之、向いて居たり、利家は、年若き  
者、似合ぬ、内股音業ありと怒りしと  
可う改宗、神君は心より、恨みさ  
有ぬ、又、あつた、の、五、夜、も、お、五、々、ん  
他、一、け、若、若、は、五、月、七、日、と、の、ま、ろ、く、  
年、を、記、し、以、編、年、は、文、祿、二、年、と、し、  
後、徳、集、集、年、一、萬、曆、は、元、年、の、事、と、し、  
今、は、是、不、信、也、

神君、神、格、云、信、長、改、宗、事、

文祿元年 四月十二日 小西、長、改、宗、事、

主、改、宗、心、相、鮮、先、の、西、河、有、是、也、  
本、帆、一、て、共、八、日、朝、解、の、冬、山、浦、小、島、津、  
是、田、長、改、宗、之、事、也、大、友、細、川、瀧、島、  
三、ヶ、元、之、橋、小、早、川、等、の、流、河、也、  
浦、海、も、小、西、の、長、改、宗、の、事、也、  
加、賀、濱、に、是、田、長、改、宗、の、事、也、  
と、改、宗、を、平、安、黄、海、忠、信、の、之、道、の、人、民、  
或、は、海、兵、或、は、近、兵、たり、朝鮮、國、王、  
李、昭、博、と、搭、く、幾、州、へ、是、り、五、子、后、妃、は、  
元、皇、哈、子、を、り、ろ、と、信、心、也、  
光、海、君、澤、南、王、子、と、生、信、也、  
光、海、君、澤、南、王、子、と、生、信、也、  
光、海、君、澤、南、王、子、と、生、信、也、





江戸より見舞書として 宰相殿迄申  
上洛の事 一 處下も大に慌入り九月九日  
小は執奏あり候三任橋中納言の形  
十月十六日太周再お京より名護屋に  
封書は 中納言殿には江戸へ留まり  
御入りの事上なきを以て奉立  
二り文源も二奉 其已に候りぬ今奉は  
世の申 花多の 名長因なる事もやと  
災横を待得たり申雙も照く心月言  
他洞（空） 洞（空） 洞（空） 洞（空） 洞（空） 洞（空） 洞（空） 洞（空） 洞（空） 洞（空）  
世の申 くらみ海は胡胡少は神宗皇帝

朝鮮の権云大に敗績すといふ事ハ  
大に逆難あり 徳兵李如松と提督と  
侍郎宋魚品と師界と 女万の大軍  
と活く朝鮮を敵にむさしハ万馬  
石星はあふ秘成をけり李如松ハ大に  
戦切と面む形は余の合戦より止る  
名護屋よりて月或日太周 神君利家  
氏 卿長政亦宗俊の法大名を反集ぬ  
朝鮮の軍介のやく形はんハハハハ  
果ハともはしは秀吉今度ハ利家と  
左軍と 氏 卿と右軍と 秀吉

自中軍の將として二十万を統率して  
海海大明の援兵を遣派して屯  
大明を攻入る燕都の君長を屠り自ら  
大明皇帝と号り支那 崑崙 余州を一統  
せんお前々もあはれ 大前々もあはれ  
心も憂ふ事もあはれ 心を併せ  
神 君長を例は替りて 少助を換へ 某  
切弱なり 弓馬の家はなきも 無草なり  
向ふ人と争ひ終る一處も 不覺を必し  
覚れ 一處下 少海海を能の 四大事  
利家氏郷あはれあはれささげらるる 中國

あはれささげらるる 中國  
少助を換へ 某切弱なり 弓馬の家はなきも 無草なり  
向ふ人と争ひ終る一處も 不覺を必し  
覚れ 一處下 少海海を能の 四大事  
利家氏郷あはれあはれささげらるる 中國  
あはれささげらるる 中國  
少助を換へ 某切弱なり 弓馬の家はなきも 無草なり  
向ふ人と争ひ終る一處も 不覺を必し  
覚れ 一處下 少海海を能の 四大事  
利家氏郷あはれあはれささげらるる 中國



已の陣より返り口使と云く後切らんと  
傳居きり太閤も後石長政の忠諫理と  
せむたりもや其後海軍の少佐と  
形く又長政の妻ハ別は作らさ向くも  
此一その頃加茂清忠の平願肥後ノ國  
佐安ノ城を薩州浪人梅北宮内重と云  
その清忠の弟と幸又一擧を得一重  
たり太閤到とせむ 神ノ君ハ使して  
長政を具して此あり向きと此其さ  
一は長く長政川具一はあり有  
り向く太閤長政をむく今其記後の由

逆徒起りぬ汝の嫡子左京大夫幸長と  
追討乃使中甘へ」と只小之と作ら向  
長政大は後ハ太閤又 神ノ君小向ハ  
幸長いも一幸若一幸多忠勝へして然れ  
う」と作ら向さされとも清忠の弟ハ  
梅北を討亡一幸」と浪を重とハ軍と  
あさむ其後長政をば肥後国と是され  
彼軍勢を少佐せ一めら向 巻末

神ノ君恩威秀次生害伊達細川

卷上小治將一幸

四年八月二日太閤殿下の寵妾長政

乃腹又思を形く若君誕生行う捨丸と  
中ハ燔燬後ニ右大臣秀頼公と少ハハ  
此若君ノ母也又付後殿トナレハ  
儀井備前守長政胡后ノ長女若母ハ織田  
右大臣信長公ノ安小若ノ方トモナレハ  
此後ハ女子之方アリ姓ハ高松宰相言次  
ノ小ノ方トモ次ハ後殿トモ次ハ太閤様トモ  
今ハ中納言家ノ小比古小備アリ又後ハハ  
位一位トモ罪多シ大出立ノ母トモ後ハ  
出立 宗源院殿トモナレハ又ナレハ  
太閤 崔松丸失リハ 後ハ只唯善悲歎

一てくも悲いありと今く内充後ハ  
幸を降りしは悦大方好ハ軍政  
トハ流將トモ但名優屋トモ 免事  
早記トモ却トモ登リトモ 此ハ統天下ノ  
治吏を以テ一義共哉書書ハハハ  
余リ臣トモ悦ハ後トモ聲ハ城衛トモ  
元満キリ此悦トモを治トモトモ  
神若トモ中納言トモ 中納言殿トモ今ナ  
中ハを治トモトモ 中納言トモ古跡トモ  
神若トモ今ナレハトモ 小文祿二年甲午  
正月トモ太閤トモ流大名小令トモ 伏見トモ

於く新博を築くは先づ先づ  
神君も又以て治るべく其経言を以てし  
是は太阿赤頼の生れしより一五  
昔より珠を惜まざりしを以て其子  
は赤頼を譲らむとせしむるを以て  
赤次と名づむとの心算なり一ことを終り  
豊后氏滅亡の始とは成りし事なり赤次  
又阿白の藩を治りしより益身を修むる政智  
を勵むる事なり其の富貴を極  
り及いつつ太阿赤下海山の恩をも  
忘るる者なればと云ふ一傲慢暴行

との一挙動も一は太阿赤の利権を  
隠退の阿居と定め大坂を乳身の赤次  
に譲りしより赤頼は威令を以て  
赤次の権勢を奪ふんとす計畧なり  
新に城經營を急ぐも一は太阿赤の籍地  
石田三成増田長盛赤の倭人亦甚虚小  
計なり赤次返還の計畧なり一胡亥藩を  
搦りしは文祿四年乙未七月赤次藩に討  
て赤次を討つるも其時の風況せし小計なり  
一は赤次大に誇りし事なり  
江戸中納言殿の信より云ふ一

たをわけて人質小可直 徳川殿を頼んで  
濟云と申す故んと日月晴三日の曉

中納を敵の方へ使と云て今朝の朝响糸  
らせんしとく招つれと云先

神君、中納を敵を都へ預け置かす

（中納）へ預けをせよと云く我指玉の味方

太閤と関白との父子の間よ必一大事起る

色一甚耐はる備へて太閤の方へ糸ら付

へ一と号し終るも一まう此頃世上の風説

奇怪く出へ大久保治部大將忠謀を使ふ  
對面一 中納之うは若年とて亮角

いきた照く朝政第一ハハ直り意く

世人も政事（可）可り目確しく終るも糸ら付

へた少くもとく使を返す一古井 高之部

利勝と申す使を返す 中納を敵を六伏見の

門前へ入るも糸ら付甚後或次よりいふと

使前へ及て忠謀又へ使小判回して

中納之うは直り糸をのり米をよとて今朝

使早く伏見へ赴き糸をのりハ更には世に

例の目立て起事と心得難思ハ直り云

中納も直り入ぬとく使を返す日已り  
年ハ別沙糸色ハ直り直り糸とん事と



叶ハハ秀次はに居き事ニ思ハルモ一々も  
甲斐守一 中納之尉付 伏見におきて  
太閤より所對面ありて是月流石 徳川尉の  
沖子ありとてく 尉下跡に怪しむいぬ形て  
秀次とは言神山より追追を 具山上人  
斗つて七月十六日秀次終つて後切り  
石彼方北山本も敵物山田二十部をとりし  
玉のやくも熟免藤入 兎小僧とも言を  
歎く肌押脱後とて一と居並て後切たり  
崔那法師も重政ハ秀次を介指一 其刀  
少く自殺一と殉死を是さへ目もして

らまは之惣切ると秀次の小方始末を  
書り一 女房達之拾金人 公達始末部  
大政を川後一 三條河原におかす首切て  
衆を回定し埋む一 乃石を之畜生堀  
と名付たり 石田三成堀田長盛ハあ人  
其妻とて沙ひしあり 里部少て元暦の  
著八海の大長徳強父子を跡をらま一 三  
例なき事と碩々ヤ著多るを一 刑は  
大吏よりけすとき一 尸と云は振戻たり  
人々は極刑に沈み 著りて其例  
なき事なりといふなり 其の中身へと

心有人は爪澤しと可き之歎きしと  
とありその頃伊達政宗ハ秀次公より一  
一して太閤を討ちて世人と謀謀令  
の風沙河に政宗大に登き大坂のありて  
徳業院の家に入ると罪を犯しと陳述を  
此頃ハ太閤大坂におとしとあり太閤  
よりハ南宮伊波揚て礼回し及び政宗ハ  
熱願する御 徳業院にありて是れ其願の誕生の  
始より大坂へありとを記すも此頃伊波の家  
とは伊波吉郎ハ嗣せらるる政宗ハ伊波  
より移り磐居をへ一而國ハ所へ在

昔侍宗徳の家人丸居百登せよと作下  
さ侍政宗大に信も免角 徳川殿と  
頼とありとありとありと伊達市智神の  
家の子をい活く御父の侍信小をい  
神君或人を 伊波とされあり胡とく  
ありとあり胡服氣成へとありとあり  
神君も伊波をいとありあり山も伊波  
命をい伊波ハ其地ハ神より火槍の  
よとありとありとありとあり  
神君あり伊波とありとありとあり  
とあり其伊波とありあり政宗ハ伊波の

此書無きやうなる 思ふよりよき小頼  
もつとくしといへども 神皇恩地よしの  
山入のつ物語のそと 其邊の言は故き事  
所例よは 申す御座りし位 其人 付能く  
るも 中勢御座りし 白く 故宗御座り  
存しへー 我く 形以思ふを 業く ひと少を  
いへ 御座りし 言ふ 申す ひとと 申す  
せんといへ 言を 申す ひとと 申す 人  
とも 畏く 御座りし 言ふ 申す ひとと 申す  
いへ 其言の 人 經の 腰掛ハ 又と 申す  
先事も 御座りし 言ふ 申す ひとと 申す

免角政家は腰掛なりとは 何と申せ  
ても 其言の 人 經の 腰掛ハ 又と 申す  
伊豫の 押後さき 魚の 脚よ 申す  
思ふ 又 都也 大の 食と 申す 思ふ  
其言とも 胸中よ 申す 事なり 此二條  
の 月吃と 思ふ 思ふ 申す 申す 申す  
何と 申す 申す 申す 申す 申す  
神 君は 能く 大坂 申す 大岡  
勘向 申す 申す 申す 申す 申す  
いつの 言ふ 申す 申す 申す 申す  
馬 申す 申す 申す 申す 申す

仍多も成 神君の若くは若くは改宗  
英在宗の家人とも謀せらるんとせしむは  
某川會く討ち捨んは何の事らうしむ  
保彼数代ハ考りしは在國の事ハホ  
累代ハ討ちぬとせしむは道に就てはぬ  
英夷ともいふも騒動川起さんも起し  
朝鮮ハ事未定らむと申又英軍起ん  
少ハ勇く英大軍ハ一最ハ歎くも  
致すともす支は改宗の宮宮ハ  
少ハ法もいふ英古ハ口仁徳もる色  
若亦ハ教免ハ成難くはく多ハ奥州ハ

大軍を向うハ改宗ハ一々ハ一々ハ  
後とて耶ハ一ちもせしむは在國の部出とも  
籠城せんは世々一休回心ハ後も何うも  
奥州ハ英ハ私事ハ一と仍らハ太閤家も  
とやせしむハ一々ハ一改宗ハ強敵ハ  
道臣ハ一々ハ一形勢ハ一々ハ一々ハ  
伊使ハ一々ハ一者もハ一一人ハ一非ハ一不  
すして弓ハ矢ハ一々ハ一地物ハ一火繩ハ一持  
者甲冑ハ一々ハ一盾上ハ一々ハ一きり改宗家も  
ハ一々ハ一作すハ一刃ハ一々ハ一群ハ一  
是古押分ハ一々ハ一伊使ハ一法ハ一入某

只今直上殿の威光くく直とはねせ  
ついでとて思ふも愚れも上殿の物  
と云れは神亦来らず交かも用ひ  
大膳病の主人とて一向も知れ  
少入の上使思束とても曾て持  
中さけ名は五郎累代の地と誰き河  
知ぬぬもさゆより天下下初とさ  
さんや大膳病の主人は後切を  
天下の心算と川流く切死せんと  
あはれ在國の神もといはれ  
仕らんも計非し神もといはれ

用いらる累代の家言も上殿の意と  
今日よそ思ふより中て口皮を返すぬ  
其趣又故家ノ謀叛の言札小記  
は中納言殿伏見の心算乃也と大  
此言札の抄を以て政家悪しと  
思ふ者も仕業切ふと相付多次  
一練せしといふ事も亦の言札に  
奴系と云ふこと交せしも政家は洋  
家と云ふ國へ歸さる又秀次世に備  
以爲付の大名賊之數用はぬ家  
用は黄金借給ふ思ふ人とならん

上は賤を利とんぬるなり細川賊中も  
忠無き此黄令二百枚を借せり物と  
今分家次郎と名経より及び太閤より  
此賊等を分傳り早く吾令返納め  
借金の券破り捨下りさもねんぬ  
甚券ハ太閤ノ後ニ續レシトモリカ  
中送付されん時は秀次郎度より  
取遣らんは三不替りさも忠無き  
二百枚の令返せん更計難くと云んぬ  
せんと思頼るより家元松井佐清中  
より是れなり  
徳川殿と云報くも

この終り一巻も此多きなり 某ハ他家  
ハ本多佐助也四五よりハ彼を殺  
徳川殿と殺て又中より

徳川殿ハ頼面堂名將三つも岩崎才一  
大名之計ひ治より云へしと云忠無  
我ハ日頃彼人ト云親クハ此女多  
惡意なりは試し正信ヲ物ト計ら  
命は依く徳信ハ正信ヲ物ト計ら  
神若其也少石松井と申ん安ハ

世と云は正信ハ松井と回道して  
所希ハ忠 神若松井と云一

少石押し若止あり幸なり減形用事下  
との心算由る心性流る何者目乃  
少燈籠と持ふれと信らる心性宛畏り  
少燈籠入一燈籠二つと持ふら口中若り  
論を要す一の二の燈籠と開くをらる  
唐櫃の内は六十枚の封一書も黄金を  
御合口也正徳は御一書共封付入書  
を足ると信らる正徳是を足ると共一年  
米未三斗は少燈籠をさす一年月は御  
久きる少燈籠と書  
神君松井  
向せり凡金銀は罪家にも是れと見ら

役人より是を目人とせらるは我心あり  
但世奴者好り此金と動蓄並一は何れ  
人知れ目も支の為年々費動地直  
忠無う此金の用は云く我は控く此金  
なり其方をもく持来せよと信らる松井  
大は悦ひく時難く支は云く細川  
己も終んとせよと云ひ終るの條  
君如心にありよと云く早く御園の中遣し  
申下り黄金を御登せ速く上西はへりと  
申せば神君いやく此筆世は御  
御筆は西家の禮と云く一支配動心





は是は甚難と評さ尙義光大に悦ひい  
しもして此世を報らんとせんと思ひ  
つゝ国原一乱に付細川伊直最上赤松  
五二の忠勤せし合ふ所仁徳の政一  
とぞ知れしと尙伊直は伊直の侍家たふすに伊直は義光の孫也

神君曰大臣伊直を討つる上は

妙討と云

校免死して良拘意らむと云ふもは  
良弓射ら得ぬ因破して謀臣は下勇略  
とぞ哀する者は老老く切天下を蓋ふ  
者ハ黄せらむは是千古の英雄豪傑也歟

中々之藩生年相氏御ハ永祿の首殿因  
伊勢の大内門の城を攻らむと時忠節  
として年十歳城を遁して多勢の力よ  
戦ひ能首取らむ城西殿の地君控て  
撃つと云ふ尙秀云云栗田徳家と合戦  
の時も尙秀云云繼一兵衛の兵加登井  
の城を攻る木造小山の軍と始  
紀伊戦り徳家の陣より近道懸戦切を  
取さんと云ふ事れ伊直は直に城を攻  
小田原の城を圍葛西大寺の城を  
討平け九戸を攻亡九戸男畠義光討

其上より高者服一秀吉公の爲に忠義  
を以て一戦切を勵ち以て豊後家におい  
て佐々木の元勳と云へ一さき八羽柴の  
号を許さる役三位の宰相兼飛騨守  
叙仰一奥州会津一石井石の領主なり  
氏郷八織田敵の鮮若氏郷の親母其は  
二條殿と申八秀吉公迎て籠りし秀  
吉助い重く難由中より秀吉公は  
氏郷を津雲渡甚と文武の才人として  
切言く威重きを忌んで己を伴留松原  
より會津へ轉封せしむ一の内には先

おそろしき奴を奥州より送吉一安心  
せりと宣ひ一とを其勇果の事と衣  
をる者は元先一と云侍流のやと君の  
悪を連合をたは徳部少人の智石田  
流部が備之威富又秀吉公へ一しるは  
氏郷先九人を改一軍の旗と爲  
了一人は非に彼軍勢の首を押し  
七日の羽川も切也其留守人も軍令を托  
者い此人敵下の由爲二心をなさん  
しなう侍堅め又世も互へうふ能  
忠心得るべきやと申秀吉公元より

其切を忘る勇と良も少し一二月に成洞  
位月をいふも肥前名護屋に陣立  
時常も憂と云ふらまゝ一二月に文祿二年  
の甚儀は後病一血をとりてより病  
治留候御ともをいふも強ふく一  
順揚り候御一二年正月病を治け  
治り上治せし病も一二月に  
文祿四年二月七日却て立て卒去りぬ  
其時氏御も忠ありし事ありしや

浪りし月次とむら敷との事  
こゝろ経手と暮の心風

年は四活歳なりとて石田三成の氏御  
とて一多難は又救有まると三成清忠  
乃小人とていふも浪海と云中て秀吉  
恩遇厚きも一八権勢比肩する者あり  
いふも殿下の後には水戸の令もいふ  
上は宗勝の家人とて山内も通演常時  
いふも知り多し一交りて厚く一常  
一車に治らひ一車に治らひ  
大事を思ふに何れは其御慶小治  
人は徳川殿なり併其は御慶一の  
大名跡も先算妙法の名將安小もいふ

女難 其 徳川 殿と一味に思はる

人は金澤宰相殿あり物も内枝等と

枯し其取根はたよく先宰相殿

と亡は沙為一なり其五六又此の時宜し

随へば様意交へ沙考ふべし物あり

三歳と回き一氏御を委否云一様

兼是の事一を瀬西掃部一掃部

勝一合を毒と悪一との事とあり文孫

五多一は政元あり尊長元年丙申と

なりぬ正月より秀吉公関東の人史と

あり河内地を築くは是也

神君の所上洛ありその五月八日

神君大納言より正徳内大臣小内侍を榊

原少御家系從五位下と評され和泉守小

内侍凡世家人は信長二人法吉十八人

及びり十一日山内槐山母實の山内所り

十三日は秀吉公僅少の系相を徳川

系内せしめ 神君の所上洛ありその五月八日

より永井古を孝文忠徳松平古を孝文忠徳

内大臣系を安成豊清之監任備八歳

昔より花やき娘ハ一ウ守一妻一と云ふ

同七月十二日夜子刻大北震む城内の神社

佛圖大厦之着意破壊——伏見城内  
嚴密詰難病——上為七房七路之押倒  
于改不松丸殿も侍倒く死を遊まふ  
く尚天愛地奴只事あふ——其の中  
可へて死すに及ぶ女より伏見捕部 治承  
して和丸と木幡山は移きんと流石の  
人丈と暮らせらる朝鮮の軍未終ふ  
さゆる毎事土木の切を信じて其も四海  
一統の時何の亡んと欲け強くぬ者も那  
八月大明の丹使楊方亭沈惟敏は并  
朝鮮の使黃佐朴弘長も泉州探り

浦も若者も九月朔日大明執鮮——乃  
使臣も伏見より多の秀吉と見と冠と  
緋衣を若——諸を受給へ巻通精進を  
己さる——其後又秀吉より与小遣り  
りしは大い怒を發——五日後を飛く  
其使臣もは金銀宝飾數多授て早く  
返帰——翌年長二年丁酉より金吾  
秀秋と大將と——宇森田秀家も毛利  
秀元を副將と定め小西行長加藤清正  
先んちと——十二方准許二月始朝鮮へ  
渡海——合戦を而結ぶ秀吉公今も其

伏見よりあつて、下知せらるる名護屋の月、  
只書云と、魚沼、孝長、三年、戊戌、正月、二、  
神君、不思成、入、申、爰、代、告、可、て、石、清水  
乃、八、境、治、り、小、神、龜、乃、程、有、新、き、事、成  
庭、一、千、頃、早、小、あ、わ、く、景、人、米、津、  
清、夢、の、喜、爰、想、入、不、思、成、乃、和、款、を、清  
き、共、款、は、

盛、た、る、宮、古、の、花、は、教、果、て、

吉、妻、乃、松、を、世、と、八、つ、元、々、

妙、多、の、秘、を、と、し、く、も、人、口、は、情、突、一、く  
世、人、奇、矣、乃、思、ひ、と、形、せ、り、蒲、生、氏、郷、の、子

爰、三、部、秀、行、は、氏、郷、の、家、を、継、承、す、  
沖、若、乃、少、年、若、少、て、世、の、人、を、も、性、は、  
物、を、と、り、人、直、利、ハ、美、を、蒲、生、氏、郷、の、  
汁、ひ、よ、を、謀、く、も、り、重、信、前、生、源、兵、衛、  
大、と、怒、り、終、り、上、哉、を、清、く、多、り、一、部、三、部、  
謀、せ、く、侍、ハ、地、知、石、田、之、成、秀、吉、と、ハ、性、ト、テ、  
物、令、せ、く、も、如、意、信、心、一、形、り、も、部、三、部、ハ、  
相、疑、ハ、卦、ぬ、是、も、一、部、三、部、日、頃、之、成、小、婿、  
其、寵、を、惜、ら、ぬ、之、其、二、月、九、日、徳、秀、切、切、弱、  
宮、中、乃、隆、動、と、さ、ハ、治、増、乃、金、津、要、拒、  
乃、地、を、さ、く、一、む、ハ、一、は、し、く、一、包、く、金、津、

百廿万石没入一州州守部家より十分石  
授らるる上り、系承人へは、従之後に中納言  
をうし、四順城後一國佐州川中、將  
四郡を將一藩を、下順系系承の四順、  
佐備一系肥州之内を治く、百石一百万石、  
封をらるる城之部、秀治より、城系小庄  
女九万八百石を將、城後、石を揚り、四路  
之方石、甘さ、春山、城、移、城、石、  
城、是も石四、城、在、山、城、と、内、  
計、秀、吉、を、以、一、不、と、を、藩、生  
く、城、地、没、入、は、家、一、強、動、の、み、

此を、河、下、城、系、と、換、り、の、子、御、ら、う  
い、ま、し、切、是、は、石、田、之、城、と、り、殿、下、小  
庄、治、ら、る、故、宰、相、氏、綱、の、小、方、は、  
城、田、殿、の、始、末、の、中、も、殊、更、家、色、傳、是  
年、は、や、下、ある、ま、し、二、八、嬪、始、末、傳  
能、り、多、吉、と、失、は、れ、上、心、も、後、ま、し、  
ま、守、と、少、へ、序、と、三、り、中、ま、り、ま、し、  
然、る、殿、下、息、も、春、心、と、動、り、田、舎、の  
家、傳、も、物、傳、後、を、ら、る、一、部、は、是、り、  
忌、慮、り、し、し、内、の、少、吉、息、傳、を、ら、  
つ、し、小、方、は、更、よ、一、部、の、い、ら、を、ま、り、入、

祇は殿下御一々其心や内を好くても  
与さざりてここに家司出ても其の心となく  
之威より何のゆるせりへは蒲生源兵衛治  
家元是は家の一大多しと云い小治を  
治く免も角中家安穩の心付いこそ  
先君へ對せし事こそ少貞操の第一と云  
ふ事よは尚君正切弱人の好はい、故  
に法に義の少少治すても殿下の少治よ  
運ては寸時一昔左馬兵衛朝の妻  
常盤の氣は太政へ送へ初は後りも  
源家再興の大切をわたり小事いと

思ひは大澤を渡り幸一由りて知ふは  
とカク侍小方治くワう、苟も右大臣家  
の事、生事、宰相殿の妻と成り彼  
秀吉は我家の奴僕なり故君の爲  
志と云んと其意は家の徳と成り家の  
徳を故つんとす是ハ奴僕のため探を失  
ふんとは自害して名をけさすと思へハ  
彼奴は腹之く我子の家臣の亡く破君  
の口縁絶せりよと云んさ、は、思定く  
都は生事へ一々の事と云は家元大  
大、一、恨は是こそ家國の大幸と都の



口度へも甚旨返答一學もてね一返下  
 くり引て数月の後小方都より上りては  
 殿下脱斜形に其夜由は奥へ遠く  
 殿下も殊に心用い衣の香薫めて酒り  
 後ふ少く方八樹くと喜有り申あり物と  
 脱上衣と衣括ははたさいと鳥羽玉の玉簪  
 いつとそも捨く方八雲深の尼衣金珠を  
 携て産く若り一院石の殿下何れもそと  
 去り一親もいて付くそ花物と一ておそ  
 せ一何れ取くそしな一男を産て  
 招くも金の着は難くあさいとけ取く

家元とも心中一計難く思ひ一て信との  
 儀之御も其力甚意申おとさん小少も  
 心に其能くそ上落せもそ其後  
 御前一て却世物一歴も一と一運殿始  
 女房甚も對面一程くそとね一教の  
 答通くそ小方八啼息も一、程く會津  
 不智の沙汰も及ひ一とそ其前生  
 家内金條百廿万石を物一儀も十八万石  
 一七せも一とそ其も家内大分  
 少くも多く後人せ一とあり

其業傳傳  
 年と福

石田之成款 亥卯事

藩生考行字部宮正留後左政の  
沙法氏縁者也 徳川家一萬石  
伺使一々 神君位名号中一  
二万石は藩生居置り志是八十石代四浦  
左近河岸六十石代藩生左文一授付  
山政は原屋左近兵右井殿馬助之  
相減して沙法也一との事也先行  
流りぬ其以石田之成内くして秀行一十送  
るは山父氏御君代之成帯下一思  
語いふ事も其情今も志き居若  
少後秀行も故宰相殿回在之成と

無意を結いたるんは殿下の所帯  
よきよ中礼 中願置補所ん取計  
中一一人分の下替宰相殿奉頭の武男  
勤切室く一のん奉所うよ勤つて一  
ゆとて中入々家元在り之成が思ふ所  
居番よ思ひ 徳川家へ入る所と中上  
々も是は汝未之成の親一と思へ共世  
一七世よとの世當なり切て又茶田利家更  
赴きいづく計いひ入まると之も利益にて  
氏御と之成と元来延き入交我之文よ  
尼中せざる事一と月之成治く

徳川家と改め忌の故藩生々家と  
徳川家縁者乃るを之にたゞ徳川家  
者多し六女也と多しとて

徳川家の虚実を伺ハ一也しとの奸計  
其一人之成り計少く藩生家亦頗置補ハ  
事は只一人にさるるに之を彼奸計  
一に臨ハ一にと言ふは藩生の家老  
才も得心一之成り計ハ後さり

神君太岡問言事  
何の頃より也や太岡大坂城の御事

頃 神君と始平田利家毛利輝元宇喜  
秀家上杉家勝鶴津義弘等の法大を  
招き宴餐する一席少く太岡の御事  
秀吉の弟は於て万人も秀吉の二行  
返らぬ我思ふに於て秀吉の如き者有  
包ふべし甚だしいと云ふ秀吉をむし  
羊飼の奴僕より起り今関白太政大臣に位  
人召を召免六十膳州を著し揚る名  
也と云ふ貴族抑無く我徳下も存る  
此果敢て肩を比す者又と云ふ一は  
是一其次に徳川家より佐長より知と

身より一時的に天下の至極と嘗て心近  
百戦百勝の切と銘一終より一負も不覚と  
九うは是勇果百人の銘を有るは  
天地より古往今來此二事より終るは  
さへふはと云声より宜いは利家  
輝元二帝勝者家藏人の法たる名以を傾け  
致るは因果報と云此果異と云敵下の  
盛徳大業非る企及を成しと一號下  
漢歌一々の中よ 沖若は何ともはれ  
秘及、亦古云くも書とては  
徳川殿のみ歎一うは何ともはれ

よよやと云る取らんとは  
沖若同百其受出い敵下の果報は古今  
一勝も一負もなし、盛徳下及昔  
古今秘漢書又なる所、心定くは武果  
一終るはさの心定くはと宜く亦  
か、新名を換へ亦古に終るは  
一負も敗軍せり、一負も  
徳川殿こそ元龜の酒味方、京中、武田  
佐吉、政信らも押付と刃をて、海へも  
をり、御知よ亦古に武果、一うはと  
一さうは、何れとては

神 若くは其の味方々系の一戦歎、目よ  
可備の 大軍味方は、僅の小勢を以て戦と  
五倍入一より其は、勝利を増えといへ  
とも、僅松少で、皆弟で、其夜辛く、夜討と  
一、一、佐吉を、備、小、刑、郊、近、川、還、く、是  
某、武、畧、たり、又、小、牧、山、中、ハ、敵、下、の、大、軍、と  
来、り、小、勢、を、以、て、對、陣、一、長、之、を、以、て、敵、下、に  
以、ん、を、討、破、大、將、之、の、首、を、北、是、某、武、畧、  
恐、ら、く、は、敵、下、の、援、有、備、一、く、と、以、ん、は、  
我、者、之、は、不、無、氣、一、く、我、者、之、は、又、武、  
茶、田、毛、利、亦、の、法、術、と、有、り、我、者、之、は、茶

少く、 神 若くは其の味方々系の一戦歎、目よ  
可備の 大軍味方は、僅の小勢を以て戦と  
五倍入一より其は、勝利を増えといへ  
とも、僅松少で、皆弟で、其夜辛く、夜討と  
一、一、佐吉を、備、小、刑、郊、近、川、還、く、是  
某、武、畧、たり、又、小、牧、山、中、ハ、敵、下、の、大、軍、と  
来、り、小、勢、を、以、て、對、陣、一、長、之、を、以、て、敵、下、に  
以、ん、を、討、破、大、將、之、の、首、を、北、是、某、武、畧、  
恐、ら、く、は、敵、下、の、援、有、備、一、く、と、以、ん、は、  
我、者、之、は、不、無、氣、一、く、我、者、之、は、又、武、  
茶、田、毛、利、亦、の、法、術、と、有、り、我、者、之、は、茶  
少く、 神 若くは其の味方々系の一戦歎、目よ  
可備の 大軍味方は、僅の小勢を以て戦と  
五倍入一より其は、勝利を増えといへ  
とも、僅松少で、皆弟で、其夜辛く、夜討と  
一、一、佐吉を、備、小、刑、郊、近、川、還、く、是  
某、武、畧、たり、又、小、牧、山、中、ハ、敵、下、の、大、軍、と  
来、り、小、勢、を、以、て、對、陣、一、長、之、を、以、て、敵、下、に  
以、ん、を、討、破、大、將、之、の、首、を、北、是、某、武、畧、  
恐、ら、く、は、敵、下、の、援、有、備、一、く、と、以、ん、は、  
我、者、之、は、不、無、氣、一、く、我、者、之、は、又、武、  
茶、田、毛、利、亦、の、法、術、と、有、り、我、者、之、は、茶

少ては此部を古は常と、某々令一勢と  
と心算者小は是とて是部和氣乃  
者は少くは此分も是は一心と某と大切  
了らざる部亦枚多可付くは其部の  
流道具は又よりくもはぬとて室子  
秀吉公活塞りぬ色よりくはくは退教  
せしとてしつと時幸才命分取つら  
神一者は先を西ると將らひ一は秀吉  
その所は、島を換さしとてしつ  
神若武意藏即ち於て流塞を以てぬ  
勢毎一も大將と思ふとてしつ

太閤教病并療月之事

今年 考長二年の五月廿例の七く公家  
武家等伏見入城し、各退教せ  
後太閤俄に心中し、心神おきや、あ  
れと少くは、竹田法下通仙院施薬院  
養安院中乃官医心を研き、薬をてし、糸  
らと流寺諸山より、秘傳教をとり、丹精を  
抽き、とてしつと文より、續も及、公武  
人、人、日と小あ、りぬ、何馬車り、亦、如  
枝く、經考充満、伏見、成、誰と  
之、地、も、れ、太閤も、今、何、と、れ、

心細く々々全收是来胆く思ふは切腹の  
秀頼卿の出来と危や角と思ひ頼の  
より生理も腹心のむす州ホと云く  
切く改勢を計りしして是く改勢の隙目  
を定らば其巾の中法大石種なる事勢  
は奉行人の道一息と受へ一私して  
根は結縁をいふはと云と第一は頼の  
共縁の事は生約津業以中村勢頼  
堀尾宗刀三人少く勤縁一  
徳川家米田家毛利輝元宇佐徳田秀家  
上は宗縁の五人は秀頼の援えとして

天下の大改をば會致して沙汰せらへ  
上は在ふ村時は伊藤政宗を和へ一利家は  
乃子肥前守利長、秀頼の以傳了る一  
五奉行石田三成堀田長盛大谷左衛門善左  
四家海軍長政高代米田徳吉流ハ是述の  
如くは内分治事と考り大改をば其の  
大光と改して沙汰をへ一又中村一氏  
生駒親正堀尾吉晴の之は、市中光と定り  
何のりよふは大小名の言は、秀頼親吉の時、  
双方より之を事と釋ゆ徳と和解せしむ  
色一在相く、武士の習ふは義、理と

云暮り静り雅き時は安んず取元長元  
 其石より出く双方と流傳せしむる一  
 秋徒傳長くは武士と事勢れは  
 免角一分の小義を捨君へ忠義の大義を  
 忘へふはと人々和睡せん振々流傳る  
 之中元と安國もは同考を論へ一常  
 大小名のみを流傳を論ずるは一との  
 事形も仍て是亦の事八月同考と系  
 大坂中へは一大名旗本法家の歴史と  
 少原一む世もは是を耳父の者とこそ  
 大坂中へは一大名旗本法家の歴史と  
 少原一む世もは是を耳父の者とこそ

大坂中へは一大名旗本法家の歴史と  
 少原一む世もは是を耳父の者とこそ

太閤合流將和體

神君神威

四年五月十六日は太閤古系乃大小名  
 徳本乃法士を伏見城より召し出されしを以て  
 今より後大小名以下法士悉く棄れ給は  
 忠勤一に心いたくしきと盟言を  
 其志は秀頼卿へ献し其志は名乃  
 家より留る朝夕も其時其志を  
 念へし其志は其志は其志は  
 神靈を以て其志は其志は其志は  
 徳川殿記文ハ



閣下美樞の中へ納りて一と一の事  
仍く 神君始奉り法大岩法士一因  
了 休のや 聖言と記 血判りて  
動せしは 大岡もかく心と安んぜども  
世形もとく 大小名法士ホ一回まゝは 太刀刀  
令張あど 多かりし世も今も 可方  
年金五兩 と後への事 計ふは 最愛  
の 秀頼に 未安き事と 種し心と恨し  
子と思ふ心の 周は 賢愚の ちち 眩く 哀  
なる 世も 六月一 白ては いとくつよ  
く の も 成 始り ぬふ 十 又く 法 是 云 乃

也 一 世 五 年 乃 英 徳 宮 院 を 務 成 出 づ  
正し 今 天 下 の 大 小 名 秀 者 々 誰 下 中 原  
を といふも 早 竟 願 心 凡 才 の 性 と 之 は  
汝 未 せ ず 汝 未 皆 少 才 微 祿 の 者 也 ち ち 之 を  
秀 者 々 授 擢 して 正 分 の 才 と 甘 一 珠 六  
天 下 乃 奉 け 職 と 法 人 の 号 致 受 ず  
事 是 令 秀 者 々 忍 ぶ べ ば や 妙 意 と 思  
く 秀 頼 と 太 切 一 乃 復 形 一 成 長  
せ ば 天 下 を 更 繼 へ ぐ 計 あり 一 計 あり  
汝 亦 心 且 多 一 秀 者 妙 世 を 在 て 秀 頼  
切 非 ち 是 ば 天 下 忽 ち 乱 へ ぎ 凡 天 下

群聖の如く一のめんとせしむは大小名法士  
一統を和し切るを貴くせんや一  
切の如く代とせしめて大小名不和の難  
以んば天下大乱の基あり秀名  
是を思ひは死して瞑目一難一我  
未未せよあも同大小名を百集の日頃  
忽然をいさく難も今も秀名を和  
せしむと今も一と余せしむる  
取り殿下の少少愚凡人の及ぶ小姓も  
感服一聖十六大小名法士と依り  
百集の之中充てり其は元長元

安西も惠瓊列府一統此長改治  
大小名是を取り秀名は忠勤の事  
是は聖名を和せしむ今文中  
及ぶ但我し不和の統と是は和  
せしむの法はこゝに以て難  
凡路不和は子細はあつて  
今もお言ひ事よま一統は和  
の事なりては義理を違はしむる  
道を失ふる事あり世に於ては一向  
免れ難しとて是も取付せしむる  
格しと和を和は長元も安西も

富樓那の無舌を語らば論すまじきも  
 能辨思少く異端を去るは量り過り  
 言ひ大とてあはれ 殿下は到りし中  
 上はは殿下も重税を削て 是を  
 思案し 之を 内府と招きて 朝廷  
 せんとも 神君と枕を 招きし  
 物と語りしは 神君國石忠安  
 といふ 其の事は 計らひし 一と  
 表へお多し 大岩列舟の中 光景初  
 奉り 舟中せし 舟り 舟中 大小石  
 取らば 舟中 舟中 舟中 舟中

秀頼は 二心 忠物仕へ さまの  
 盟言 敢て 捧し 是は 何の 口説く 人  
 又 我し 不和の 説と 一時は 秘腹 せん 人  
 武士 道と 失ふは 似たり 世に 所免と  
 形も せうと 一回は 中 若し 是は  
 神君 舟中 各々 さまの 舟の 舟中  
 各々 や 紀元 文の 表を 破ら せし 中  
 之の 凡 天下の 乱を 根元は 治績 不和  
 して 各々 威權を 争ひ 舟中 舟中  
 挑り 起す 舟中 舟中 舟中 舟中  
 公威の 合隊を 還す 舟中 舟中

たは付、是は人乃道好んや、善天  
乃下主出り、學知なり、公儀の金原  
と遷杞して、由家乃祿を受へ、其  
所中某とて、も中より、ぬ人、も故、名  
乃、併公儀を廢し、私をを、之んとは、  
神をて、好せ、其、又、於て、は、誰人、  
然と地とも、今日、乃、池水を、偏を、以、深、  
傾、膝、故、一、先、日、海、ら、も、一、記、法、の、也、  
公、儀、為、空、一、さ、さ、さ、の、毛、以、故、一、  
以、と、記、さ、さ、さ、り、唯、今、為、を、一、  
さ、亦、第、一、月、乃、和、少、一、端、一、忽、然、と、地

より大如、は、其、一、仍、て、殿、下、口、為、中、山、也、  
天下、乃、為、各、又、和、睦、の、也、以、其、さ、さ、一、如、  
其、一、各、先、日、捧、き、の、聖、約、を、破、り、公、儀、を、  
蔑、如、一、私、を、張、り、せ、ん、と、の、事、一、な、り、  
某、殿、下、一、中、て、記、法、の、意、返、揚、り、其、一、以、從、  
遠、省、の、眾、神、の、殿、下、の、以、法、を、一、と、  
以、之、を、其、以、刻、の、道、也、又、版、一、神、威、光、の、  
卷、を、又、大、山、名、法、士、也、也、一、  
内、府、の、以、此、を、以、私、我、一、愚、味、の、一、  
私、然、を、以、せ、ん、と、せ、一、知、思、入、海、  
は、法、乃、也、全、お、も、り、和、睦、は、一、さ、さ、

神君も既立て来小  
入りの到と告給へば太閤悦斜す  
神君も此の如く感せしむ本筆

諸將根藉分 神君威腹法將事

神君の所感懐もく大岩法士一統  
初膳の岩せしは太閤悦斜す  
ありし之中尤も命をらるる諸將法士小  
管通を揚し饗膳終て後之より之充  
長老安玉と小岩席小切能て酒屋  
秋別へ沙信一節は法將胸中法士の  
送帳指し定む官位入るが大名小岩の

足利も形く酒屋小岩も世思ひさ  
付さふとく生れ乱れ乱れ  
高卑貴賤の次第も障り乱れ  
奇て飲むは是れは春せん杯と云ふ  
一嘗り懐の腹を揺る拍を叩きし  
も形勢は是代も此の根藉なり  
五吉の之充あへて傳世甲より入る  
彼方をすくはるる女を執とく  
とも更に乱れやゆさるる此種物も  
少へるるは 神君も此の如く  
杯盤根藉と踏教して之を中央

憤怒ハ心ヲ御致シテ左右ト白服テ之  
法ハ法ヲ大ニ忘ル各本ノ座席ハ  
之端ニ在リ  
神君ハ昭皇ノ子ナリナ  
クハ大ニ御号ニ由リ侍ルハ今日御  
ノ法ヲ法ハナシト果ト致スヤ果先  
和膳ノ中ニ侍ル時若取彼セシ  
向古旨御下ハ中ノ座ニ及殿中ノ大  
順ヨリ引答直ニ侍ルヤ各ハ法  
守又和膳ノ多ヲ致シナシト  
是報ヲ致シ殿下ノ思ヲ慮ント  
世ハ喧嘩振藉ノ舉動又及ス

全書を胡譯せらるると云へきこと  
一層ノ出は皆果々おもひなり吾等ハ  
下知を和ハ法ハと同ラシク  
健士皆集ムハ八幡寺も懸淡  
寺ハも皆集ムハ八幡寺も懸淡  
凡ク大小石法士一統我ハ沈黙  
礼儀を執リ及吹置去知ハ  
して身ノ重知と夫ハ一向空免ハ  
沙汰ヲ希キト千謝万謝して致  
神君御ハ神君色ヲ和ラ付ク  
匠丈由楯礼儀ヲ知向法候事

新不札の以孫より其有(き)今より  
後改々和歌乃(と)重(かさ)る(と)く  
更(また)入(い)り中村一氏(なかつむらいち)漢州長改(わんしゅうちやうかい)徳(とく)宣(のり)院(いん)  
常(とこ)も能(よ)くあつ(と)して法(ほ)つ(と)し和(わ)睦(ぼく)乃(の)  
重(かさ)る(と)く一(ひと)各(各自)恩(おん)を謝(あが)りて退(ひ)き(と)せ(と)り翌(あした)  
十七日(にじゅうしち)太(た)閏(閏) 神(かみ)君(きみ)を招(まね)ひ

内府(うちぶ)昨日(きのう)の舉(あ)げ動(うご)く文武(ぶぶ)並(なら)べり威(い)徳(とく)  
二(ふた)好(この)く今(いま)古(いにしへ)の良(よ)術(じゆつ)と(と)い(と)へ(と)も(も)及(およ)ば(ず)  
非(ひ)を(と)く(と)く後(あと)と(と)流(なが)し一(ひと)威(い)悦(えつ)一(ひと)之(この)を(を)経(へ)緯(ゐ)緯(ゐ)緯(ゐ)  
按(お)む(と)く(と)く又(また)村(むら)井(い)勘(かん)十(じゅう)部(ぶ)亮(りやう)吉(きち)家(け)一(ひと)  
秀(ひで)吉(きち)公(こう)山(さん)頼(たの)朝(あ)し大名(だいみょう)小山(こやま)乃(の)中(なか)

更(また)き(と)者(もの)と 内府(うちぶ)之(この)才(さい)と(と)並(なら)べ(と)し  
色(いろ)一(ひと)秀(ひで)頼(たの)公(こう)乃(の)山(さん)乃(の)由(よし)出(い)して肥(こ)養(やう)叔(しやく)  
利(り)長(ちやう)と始(はじめ)大名(だいみょう)小山(こやま)乃(の)中(なか)乃(の)才(さい)能(のう)り(と)く  
改(かい)宗(そう)後(ご)と肥(こ)養(やう)叔(しやく)と(と)並(なら)べ(と)し乃(の)以(よ)合(が)ひ(と)く  
改(かい)宗(そう)後(ご)又(また)酒(さけ)と府(ふ)より胸(むね)へ(と)入(い)り(と)く  
そ(と)く(と)く(と)く 内府(うちぶ)以(よ)給(たま)ひ乃(の)松(まつ)子(こ)も  
只(ただ)度(たび)其(その)師(し)利(り)宗(そう)卿(けい)九(く)草(くさ)時(とき)乃(の)湯(ゆ)へ  
以(よ)入(い)り(と)く九(く)草(くさ)時(とき)乃(の)湯(ゆ)へ(と)入(い)り(と)く  
翌(あした)日(ひ)喪(さう)一(ひと)改(かい)宗(そう)乃(の)内(うち)信(しん)叔(しやく)乃(の)職(しやく)り(と)く  
利(り)長(ちやう)後(ご)以(よ)其(その)乃(の)改(かい)宗(そう)乃(の)兄(あに)乃(の)術(じゆつ)へ(と)く(と)く  
中(なか)乃(の)才(さい)一(ひと)利(り)宗(そう)卿(けい)我(われ)乃(の)才(さい)能(のう)乃(の)時(とき)ハ

左儀の事一歎ぬもの其心之一段  
能好を〜 貴山と見ゆ是成此時の  
事なり 且日振籍の挙動せしは  
利長政宗亦第一と云ふ事あり 百万石  
に之の先法候さ存挙動と一吸と  
いひ〜 其世の人情世体思ひ  
中〜 是なり 徳元乃酒宴を我輩の  
事と記さ〜 八濠なりや

伏見城下初方澄動と事

同六月十日の夜伏見の城より御筆の  
色りよ 表之の祝の事〜 秀吉公

病中〜 与〜 上原小藩圖と〜 き曲派  
〜 若少〜 秀頼南〜 切き  
児姿流石よ〜 ぬきおと〜 若乃尼  
せ〜 是なり 五重の恒例〜 誓ふ以指揮  
〜 大小名皆兼子 攻襲の化法者  
〜 事終秀吉公の法及人〜  
向ひゆ〜 秀吉殿御しく傾たり 秀頼  
十五歳に至るは 天下を譲らんと覚悟  
せり 秀頼成長〜 是れ恒例を執り  
と見え 我心い〜 娘〜 人と樂〜  
今更の病も〜 治〜 軽〜 切〜 引け



秀頼の成長と云ふは、  
鬼神を歎く秀吉公も子と云ふ心乃  
固より心も弱く只さめと云ふ  
其志の衰さは、  
又此山家何候の大小名此等も  
是の巨声言く泣く河の各皆  
是の一人日御のう運教を  
法士一鏡のうも酒と法  
をを及す御下の人  
竟去と歎服一是こそ天下の大  
云能こそ可是貴別よ及  
天下の大東

南小意遠の強動文より  
小月、敵下、薨去、  
兵之、此、城下、  
報復も、  
た、不和の、  
き、水、  
紙、  
法、  
こ、  
家、

合戦ハ一、町人は大々兵を起給也  
 らして叶し備へと家々籠具を積込  
 先きを龍と討け切き子を携へ八方へ  
 散れず其物言は陸地も喪くせり  
 徳川家の初代百段は其力ありあり  
 井伊直政も多志給柳永原政石川藤通  
 平岩親吉の文人替へ上京して、又  
 徳定も定こへ、此の時直政上京して  
 勤番せりは、早速徳川の儀より  
 駿馬の忠告、子内記忠朝、此様勤儀  
 何事より記りしと

神君向給ふは相模の地へ故も馬の馳  
 へりて、陸地の所へ、中へ、  
 左殿のり、小は北を待へ、三郎、凡々  
 此れと、仍りて直政も、只一騎、此れ、  
 洛外、此れ、一、所、事、密、之と  
 此れ、一、所、事、密、之と、  

 跡見七月初旬又十六日、直政、三、石川大帥、此、事、  
 す、此、時、直、政、大、城、記、記、編、年、記、六月、十六日、直、政、と、す  
 本草、小、伝、記、系、一、月、十九日、直、政、を、七月、の、直、政、と、す、  
 此、事、を、一、と、す、と、す、六月、の、直、政、を、直、政、と、す、

太閤遺記 石田増田を去る事

七月の初日は太閤神使く、  
 大坂城へ、おん、病、又、重、り、

伏見へ歸りてひて十二日病深きなり  
一は、神君を病床より招きし秀吉  
今我の病をよも平收まへし、我死せば  
忽天下瓦解して乱れ起す  
徳川殿は軍旅の智識文武の良將  
此多乱を恐んよ、他は又五畿一統して、  
天下軍勢の糧は、徳川殿へ漕りて  
我子秀頼切して父は別を孤獨と爲す  
生長の後其分量を計りいふととも  
少くは少くもさるとは定るは  
神君も少くも神を治し治し某短也

淺量よ一ていって天下の多糧を握り  
四海を治す重任は誰んや、天下万歳の後  
秀頼御内々、あつは四海の中誰か  
重んじら若此のき能といへとも人心則  
雖一能く神策を残して四子孫長久  
の基を密造すべし、某は於て、此を  
計候は尚ら此と稱し、今太閤様とまき  
枕を傾けし今海内の乱獲を見向し  
文武の徳を備へ天下の統候は号令  
せん人は、内府の亦も昭一勅て我  
朝は信じて天下安泰を計らひと

此多きとも 神君不肖の多 天下の  
大任を交授しと再三に辭退歸し  
退を中へ太周心を安せし 手後 後田共  
石田三成 有人をとりて 斯くも 人の事  
斯く 誠せらるる 一人の公侯の殿下  
古人の言双の 大徳盛業を 用ゝを たりし  
幸よ 垂頼公と 中絶仰の 徳君而し  
四海の 泣候 膝仰 せし 如き 殿下 千辛  
万苦 汗馬の 勞を 積り 幸 創り  
天下をいゝゝ 他人は 譲り ぬき 是れ 社  
四海 大乱の 衰あり 天下の 万民 皆 殿下

徳沢を 盡さ ざる 者 則ち 師て 四海の  
大少 名に 惑く 殿下の 仁徳を 信ぜ ざる 者 是れ  
若君と 天下の 主たり ぬん と 願ふ ぬん  
則ち 内府と 始末 四毛 利字 在 田上 行  
善 備 佐して 天下を 号令と 絶さ せり ぬん  
忠を 懐く ぬん 有へ ぬん 我 亦 とも 事 八  
州して 殿下 以 爲 怨 ぬん 人 と たり ぬん  
中 にも 及 於 骨 神 心 若君の 中 代 監 石  
小 寺 とも 手 握り ぬん 他人 とも 手 握り ぬん  
ぬん 事 とも ぬん 巧 合 色 ぬん  
一 運 命 の 法 とも ぬん 是 れ 右 周 候 則

其の如く此後之人の充持立寄り亦九和して  
君と君と聖裁成へる言由を定りし也  
大成紀編年の中は其府に充て置るの職を言ふと其西暦有  
文廟四年八月言此の如く小田川流系を流く六人連署の文書  
を流せりと言ふ事業は流系を流せり言ふ事なり言物也  
と流系を流せり言ふ事なり言物也

瑞 ちるる天下を以て子と漢の如他人の  
漢の如く成 竟無の以後は更に少へ  
蜀の昭烈帝の崩せりる時諸葛  
孔明も嗣子劉禪を祀して嗣子  
怖くは怖くは若其不中せんは  
君自ら取るといふ事も其は瑞也  
其くいふ事も更に中傳の如く瑞は秀者

神 君の孤を祀 其儀を流らんとせば  
昭烈の孔明を祀せんとせば似たり  
石田増四の言は其の如くを述りハ  
さういふ情へきものなりと物知事  
中 是れ心も此説は勿りとも思ふ  
秀者生誕の事業は流系流中  
かや為其礼 石田六勝心の考は其は  
秀者の如く心を察して例の迎合の  
術を以てしるるは秀者石田の流  
其の如くは其を流ししとは是れ見へ  
我 神君又其を流ししは如く秀者

死に臨まざる其治法もは論りせざる  
明譽の故不<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>之格の強を國粹  
能似く其心は其の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>す  
一皆盟を勸<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>也  
神君の<sup>レ</sup>忠告<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>じ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を  
乃<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>保<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ  
せ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也  
と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也

大岡史記小倉村朝鮮軍談  
小倉播磨守秀政一紙片相布止且元乃

あ人は<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>秀頼<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也  
一<sup>レ</sup>八月<sup>レ</sup>十五日<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>大岡<sup>レ</sup>枕<sup>レ</sup>迎<sup>レ</sup>く  
石<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>汝<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>形<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>  
我<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>らん<sup>レ</sup>絶<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>らん<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>失<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>  
縁<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>止<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>  
以<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>止<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>と  
す<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>南<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>禍<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
彼<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>鮮<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
亦<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>戦<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>治<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
我<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>後  
不<sup>レ</sup>彼<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>万<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>勢<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>

備ん事一思ひもふらば又希有  
免れて備へても有へども凡そ  
不効つても仇を忘るぬは生類の習  
あり備へる大國の君臣をわたり此  
年月の仇報しんと思はさんさぬ事  
一 元世祖本朝を代人とせしむるを  
鑑み難くも此時より秀吉の後誰  
有てつて本朝の勤あらん故に斗  
一 徳川の内府こそ此朝は徳川へぬ  
一 徳川も物も少く本朝の大徳を被さん  
よは神祖も其徳を感へるも其

切を称する万民も其徳を感へるも其徳を  
返して天下自ら彼家は備せん物の  
心も毎にぬ者方あり一 方よ我朝恩を  
忘るる勿れ人の秀頼は天下を治さん  
と 彼人と合戦を結ぶ我家自ん  
誰と回らるへふは本朝の昔より今  
百五の世より長く是朝を替ふる  
共金貨もふふといへとも終る二百も彼  
るは備へる破らる事一 秀吉の時  
到り上百万金の家祿を先一 下六百萬の  
生類を止さん事一 口惜事一 ありや





安をへき人は 内府のふよ姫を娶  
内府は六先の上首よりて秀頼の  
後見として専ら天下の政務を沙汰  
せしむる利家は秀頼の傍に侍りて大坂  
城に在りて切腹を保護し一令を待す  
朝鮮の城番に十餘万の軍勢  
令く備帆させん事と思へば我死せし  
時は先隱憂より秀頼を死と解し  
清州石田南へを海海を軍勢と  
ぬらむむへし行りといへとも此長朝鮮の  
形勢も計り難し 若川此意を旨治を

以ては 内府の利家は 幸人破死へ海海  
せしむる大明の奴系切腹し一は源示し  
又と清く在陣の法軍を川をりをうしき  
あり利家は一向秀頼の生をり程程を在陣と  
と宣ひて秀頼の心は  
神君も利家は古の源は固くを度とを  
多しし 神君は利家は 向のせらも  
願下るは若君の心の心はを下せらふ  
と云ふなり 其評我は一筆記 四月一  
日へしと信若も利家は 是の思ふよ  
しと云ふ 今日信若も 是の思ふよとの

山文  
神  
世  
天  
藤

改正  
卷  
拾

愛 知 県



1103264660